

学位論文要旨

国語科クリティカル・リーディングの研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期

学習開発専攻 カリキュラム開発分野

D153026 澤口哲弥

■論文構成■

序章 研究の動機・目的・方法

第1章 国語科における「クリティカルな読み」の理論と実践

第2章 C.Wallace の Critical Reading 理論

第3章 国語科 CR の指導理論

第4章 国語科 CR の観点による教科書教材の検討(小学校)

第5章 国語科 CR の観点による教科書教材の検討(中学校)

第6章 国語科 CR の観点による教科書教材の検討(高等学校)

第7章 新しい教育状況と国語科 CR の可能性

終章 研究の成果と課題・今後の展望

参考引用文献

資料

謝辞

■課題の設定・目的■

社会構造、政治や経済の在り方などが激動する現代において、学習者に「生きる力」や民主社会の形成者としての社会参画の資質を育むことは、今日重要な教育課題となっている。新学習指導要領(2017年度告示)が示した「思考力・判断力・表現力」「主体的・対話的で深い学び」等の概念は、このような課題を解決し、学びを社会に活用していくねらいを持つものである。

このような状況にあって、国語科の学び、特にテキストを読むことを社会的な実践とすることは解決すべき大きな課題だと言える。しかしながら、この課題を解決する上で重要な役割を担うと考えられるテキストをクリティカルに捉える読みの在り方については、十分な検討がなされていない。筆者は、このことを今日的な社会状況の有り様から再考し、課題を乗り越える新しいクリティカル・リーディングの指導理論、カリキュラムを構築す

ることが必要であると考えた。

そこで、以上の課題を解決するべく、新しい指導理論を「国語科クリティカル・リーディング（以下、国語科 CR）」と名付け、次の 5 つのことを研究の目的として設定した。

【研究の目的】

- ①国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の成果と課題を明らかにすること
- ②「①」を解決するための新しい理論を内外の先行研究に求め、読むことを社会的実践とするための理論的な土台を構成すること
- ③「①」「②」をふまえ、国語科 CR の指導理論をカリキュラムも含め構築すること
- ④「③」での理論を実践の場で検証し、実効性をもった指導理論として調整を図ること
- ⑤新しい教育状況の中で国語科 CR の可能性を展望すること

■本研究の成果・各章の概要■

上記、①から⑤の目的について、本研究によって得られた成果と課題、および今後の展望を以下に整理する。

1. 国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の整理（目的①）

第 1 章では、OECD が PISA に着手した 1997 年前後以降の文献に的を絞り、近年の国語科における「クリティカルな読み」の先行指導理論を調査、整理し、その成果と課題を明らかにした。具体的な方法としては、国語科における「クリティカルな読み」の指導理論を「言語論理教育」「評価読み」「メディア・リテラシー教育」「PISA 型『読解力』における熟考・評価」「批判的思考」の 5 つの類型に分け、それらの先行研究を整理することからその傾向を見出し、5 つの指導理論をマトリクスに布置した。

その結果、ことばに着目することを中心としながら読むことを社会的なこととして扱う「言語×社会的」の象限に研究・実践の空白が見られることが示唆された。そして、読むことを社会的実践とするには既存の「クリティカルな読み」の指導理論に加えて、さらにことばに着目しながら読むことを社会的な実践に拡張していく理論が必要であることがわかった。

2. 内外の先行研究による国語科 CR の理論的な土台の構成（目的②）

第 2 章では、第 1 章で見出された問題の解決として、Wallace の Critical Reading 理論に着目し、以後の国語科 CR の礎となる理論としての可能性を探った。

Wallace の研究については、文献調査のほかにインタビュー調査も実施し、問題意識、

これまでの研究の経緯、目指す研究の方向性、また日本の国語科教育への援用の可能性等について総合的にその知見を獲得することを試みた。

その結果、Wallace の Critical Reading 理論は、目標論としてテキストを社会的な産物として読む理論であることがわかった。フェアクロフ、フレイレ、ハリデー、ハーバーマスなどの研究を背景理論とした読むことを社会的実践とするその理論は、第1章で明らかになった「言語×社会的」の空白の問題を解決する理論として期待できるものである。

教材論では、コミュニティ・テキスト (CMT) を導入しながらも、Wallace はあくまで印刷された文字テキストから社会を読み解くという方略を大切に、クリティカル・リテラシーの理論を軸とした「5つの問い」を中心にその教材の社会的要素を読み解く実践をしていた。この、文字を中心とした教材選択は国語科教育への援用の可能性を示すものと言える。また授業論では、ハーバーマスのコミュニケーション論を背景理論としており、国語科教育における言語活動や、新学習指導要領で提起された「主体的・対話的で深い学び」を実践するための参考となる理論となることがわかった。

3. 国語科 CR の指導理論の構築 (目的③)

第3章では、Wallace の Critical Reading 理論に加え、新学習指導要領の方向性や OECD の読解方略の理論を参考とし、より実効性のある今日の国語科教育の状況に見合った国語科 CR の指導理論の構築を目指しカリキュラムとしてまとめた。

国語科 CR の指導理論には二つの軸を設定した。一つは読解のプロセスであり、もう一つはフレームワークである。

読解プロセスは、PISA の「読解力」の概念などを参考に「理解する」「推論する」「評価する」の三つの領域で構成した【表1】。この読解プロセスでは、既存の国語科の教材や学習課題、テストなどの状況分析から、特に「推論する」ことを重視した。

【表1】 国語科 CR の読解プロセス

理解する	テキストの複数の情報を統合し、内容を正確に理解する。
推論する	テキスト内外の情報を関連づけて推論する。
評価する	テキストを社会的・文化的文脈に関連付けて評価し、再定義・再構成する。

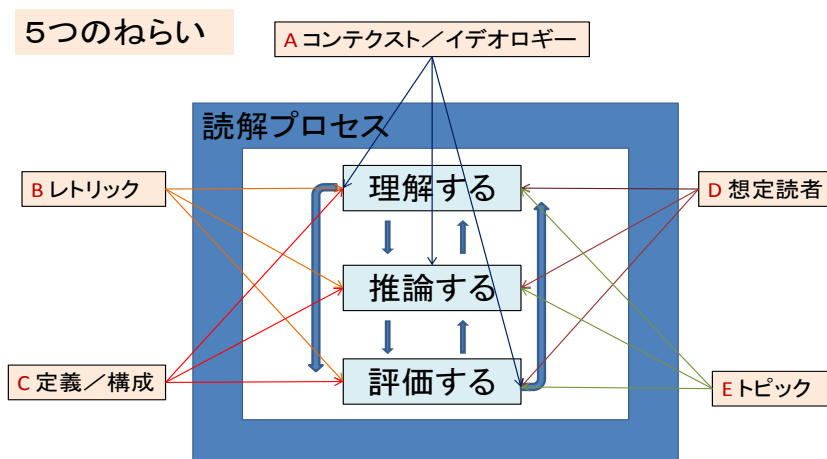
フレームワークは、Wallace の理論にあった「5つの問い」を「5つのねらい」として構成し、その観点からテキストを分析した。テキストの生成過程としてのコンテキストや背景にあるイデオロギーに着目する「コンテキスト／イデオロギー」、テキストがどのように読み手を感化しているかそのレトリックに着目する「レトリック」、複数の視点からテキストを読み直す場合それをどのように再定義、再構成することができるかに着目する「定義／構成」、テキストの出所と想定された読者を考える「想定読者」、そしてテキストが示す問題の構造を考える「トピック」の5つである【表2】。

【表 2】国語科 CR の「5つのねらい」

記号	国語科 CR の「5つのねらい」	キー・コンセプト
	Wallace の「5つの問い」	
A	テキストの書かれた背景、問題意識を考える。	コンテキスト／イデオロギー
	(このトピックについて) なぜ書かれたのか。	
B	テキストのレトリックを分析し目的・効果を考える。	レトリック
	(このトピックについて) どのように書かれたか。	
C	複数の視点からテキストの定義・構成を考える。	定義・構成
	(このトピックについて) どのような他の書き方があるか。	
D	テキストの出所と想定 (想定外) 読者を考える。	想定読者
	誰が誰に対して書いているか。	
E	テキストのトピックに見られる問題の構造を考える。	トピック
	トピックは何か。	

国語科 CR の指導理論では、これらの二つを「国語科 CR における読解プロセスとフレームワーク」としてまとめた【図 1】。

【図 1】国語科 CR における読解プロセスとフレームワーク



一方、学校での段階的な取り組みのことを考え、K-12 などの内外のカリキュラム論を参

考としながら、小学校第1学年から高等学校第3学年までを6つのステージに分け、カリキュラムを規定した。カリキュラムは、先の「読解プロセス」「フレームワーク」ごとにまとめた（「フレームワーク」を【表3】に示した）。

《6つのステージ》

【第1ステージ (St.1)】 小学校第1学年～第2学年

【第2ステージ (St.2)】 小学校第3学年～第4学年

【第3ステージ (St.3)】 小学校第5学年～第6学年

【第4ステージ (St.4)】 中学校第1学年～第2学年

【第5ステージ (St.5)】 中学校第3学年～高等学校第1学年

【第6ステージ (St.6)】 高等学校2学年～高等学校第3学年

【表3】 国語科CRのカリキュラム②（フレームワーク）

	A コンテキスト／ イデオロギー	B レトリック	C 定義／構成	D 想定読者	E トピック
St.1	テキストが書かれた理由に興味を持つことができる。	テキストの表現の工夫に興味を持つことができる。	テキストで扱われていることからの意味を理解しようとすることができる。	誰がどんな人にしたテキストなのかを想像することができる。	何について書かれたテキストなのかに気づくことができる。
St.2	テキストが書かれた理由を考察することができる。	テキストの表現の工夫を指摘し、その理由を考察することができる。	テキストで扱われていることからの意味を理解するとともに、その意味を別の視点から捉えることができる。	誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考察、理由づけることができる。	なぜ、何について書かれたテキストなのかを考察することができる。
St.3	テキストが書かれた由来、背景を考察することができる。	テキストの表現の工夫とそのねらいについて指摘し、筆者の意図を考察することができる。	テキストで扱われていることからの意味を理解するとともに、その意味を別の視点から捉え直すことができる。	誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考察、その理由を複数の観点から考察することができる。	なぜ、何について書かれたテキストなのかを考察、中心となるテーマを指摘することができる。

St.4	テキストが書かれた由来、背景、および筆者の問題意識を考慮することができる。	テキストの表現の工夫と目的を分析し、それらの関係と妥当性について考えることができる、	テキストで扱われることがらどどのように定義づけられているかを考え、別の定義づけを考慮することができる。	誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、その社会的・文化的な関係性を想像することができる。	なぜ、何について書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマを正確に指摘することができる。
St.5	テキストが書かれた由来、社会的・文化的背景、および筆者の問題意識を多角的に捉えて考えることができる。	テキストの表現の工夫と目的の戦略としての関係性を分析し、評価することができる。	テキストで扱われることがらどどのように定義づけられているかを考え、別の定義づけを具体的にすることができる。	誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、社会的・文化的な関係性を分析することができる。	なぜ、何について書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマ、隠れたテーマを指摘することができる。
St.6	テキストが書かれた由来、社会的・文化的背景、および筆者の問題意識を多角的に捉えて、コンテキスト、イデオロギーを分析することができる。	テキストにおけるレトリックの目的・効果分析をし、筆者や読者、社会的・文化的背景との関係性を考察することができる。	テキストで扱われることがらどどのように定義づけられているかを考え、社会的・文化的な観点から別の定義を見出して再定義し、テキストの再構成をすることができる。	筆者、想定読者、想定外読者を考え、テキストの見えない社会性・文化性とそのねらいについて考察することができる。	何についてなぜ書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマ、隠れたテーマを指摘し、テキストの真のねらいを考察することができる。

4. 国語科 CR の指導理論の実践の場での検証（目的④）

第4章、第5章、第6章では、国語科 CR の指導理論にもとづいて、教科書教材の改編を試みた。

第4章では小学校の教材を検討し、その改編を試みた。

東京書籍版の「読み比べ」教材を取り上げ、第2学年から第6学年までのすべての教材を、国語科 CR のフレームワークの観点から分析し、国語科 CR の読解プロセスとフレームワークの観点から改編を行った。

分析では、「レトリック」の要素が一定見られ、「想定読者」の要素も一部見られたが、

そのほかの「5つのねらい」の要素は見られなかった。

改編にあたっては CR のフレームワークの要素を満たすように努めた。改編案は、手引きのみを改編した A 案と教材にも手を加えた B 案の両方を用意し、それらを小学校に依頼して調査を行った。調査で得た学習者のワークシートと担当教諭のコメントから改編案を再修正し、それを「国語科 CR による教材・学習の手引きの改編—小学校」としてまとめた。

第 5 章では中学校の教材を検討し、その改編を試みた。

小学校と同じく東京書籍版の「読み比べ」教材を対象とし、第 1 学年から第 3 学年までのすべての教材を国語科 CR のフレームワークの観点から分析し、その結果をもとに手引きの改編を行った。

中学校教材については、国語科 CR のフレームワークの観点から手引きの調査を行った。結果は全 26 設問のうち、「レトリック」の要素があるものが 2 問、「定義／構成」の要素があるものが 1 問あるのみで、小学校教材と同じように国語科 CR の「5つのねらい」のフレームワークに該当する手引きは少なかった。

改編では、小学校と同じく国語科 CR のフレームワークの要素を満たすような改編を行った。改編した教材は中学校、高等学校に依頼して調査を行い、学習者の解答したワークシートと担当教諭のコメントをもとに再修正し、「国語科 CR による教材・学習の手引きの改編—中学校」としてまとめた。

改編した手引きの一例を次に示す【表 4】。

【表 4】 改編した手引き（「黄金の扇風機」「サハラ砂漠の茶会」第 3 学年）

【理解する】	
①二つの文章はそれぞれ「美」をどういうものだと捉えているか、まとめてみよう。	E
②「①」の見方・考え方は、文章のどのような書き方に表れているか、まとめてみよう。 ②-1 言葉の使い方に着目しよう。 ②-2 構成やレトリックに着目しよう。	B
【推論する】	
③二つの文章は、どのような読み手を想定し何を目的として書かれたものか考えてみよう。	D
④二つの文章についてそれぞれ次のことを考えてみよう。 ○黄金の扇風機 ・筆者の論からすれば、「美しさを見出す」ことの出来ない人はどのような人と言うことができるか、考えてみよう。	

<p>○サハラ砂漠の茶会</p> <p>・筆者は、美が「人間は皆同じである」ことを教えてくれると言うが、それはどのような前提から成り立っているか、考えてみよう。</p>	
<p>【評価する】</p>	
<p>⑤「平和な世界を創る」という題目で意見文を書くことになった。意見を支える根拠として引用する場合、あなたはどちらの文章を選択するか、またそれはなぜか。考えをまとめ、話し合ってみよう。</p> <p>⑤-1 自分が創りたい平和な世界とは何かを定義しよう。</p> <p>⑤-2 活かせる要素を文章から抽出し、関連づけよう。</p>	<p>C</p>

*右列の A～E は【表 2】の A～E に対応している

第 6 章では高等学校の教材を検討し、その改編を試みた。

高等学校の調査は、国語科教諭の研修会の機会を利用し、教材改編の可能性を探った。

東京書籍版の高等学校「国語総合」の評論・随想教材の手引では、「理解する」に該当する設問が 71%、「推論する」に該当する設問が 1%、「評価する」に該当する設問が 28%であった。また、「5 つのねらい」の要素がある設問は全 83 設問中 6 設問にとどまった。

以上の分析から「推論する」こと、「5 つのねらい」のフレームワークをなるべく均等に布置することを目標に改編案を作成した。改編案は研修会で取り組んでもらい、その可能性を検討した。

これらの検討から改編案を修正し、「国語科 CR による教材・学習の手引き改編—高等学校」としてまとめた。

小学校、中学校、高等学校の調査からは、既存の国語科教科書にはクリティカル・リテラシーの視点はなく、読むことを社会的実践とするには一定の見直しが必要であると思われた。一方、学習者の解答から、国語科 CR の指導理論は、問い方や授業方法に配慮すれば十分学校現場に受け入れられる可能性があることが示唆された。

5. 新しい教育状況における国語科 CR の可能性と展望（目的⑤）

第 7 章では、国語科 CR の指導理論を、新しい教育状況の中でどのように活かせるかを、新学習指導要領の方向性や官民あわせたさまざまなテスト、問題集の分析から考察した。

調査は、新学習指導要領の「思考力・判断力・表現力」の概念や「主体的・対話的で深い学び」の提言、全国学力テストの B 問題、大学入学共通テストのモデル問題などの官製テスト、および活用型の学力に照準を合わせた民間によるテストや、その育成を企図した問題集などを対象に行った。テスト、問題集の調査は、第 4 章、第 5 章、第 6 章で行った調査と同様に、国語科 CR の読解プロセスとフレームワークの観点から設問を類別し、そ

の傾向を量的、質的に分析し考察した。

その結果、全国学力テストのB問題は、読解プロセスでは教科書の手引きの分析と同様、「推論する」に該当する設問の割合が低かった（小学校／「理解する」62%、「推論する」19%、「評価する」32%、中学校／「理解する」65%、「推論する」3%、「評価する」32%）。また、フレームワークでは「レトリック」と「想定読者」に該当するものが若干見られる程度であった（小学校／「レトリック」17%、「想定読者」10%、中学校／「レトリック」22%、「想定読者」9%、「定義／構成」4%、「トピック」1%）。この傾向は2017年に公開された大学入学共通テストのモデル問題でもほぼ同じであった。

この問題の解決としては、例えば日本生涯学習総合研究所（2016,2017）がテストづくり理論の中で示した別案がある。このテストづくり理論は、国語科CRの読解プロセスと共通する概念を持つものであり、国語科CRの指導理論がその解決に寄与する可能性が示唆された。

これらのテストは、積極的に図や表、会話などを取り入れたマルチテキストを用いていることで共通していたが、その一方、「総合学力調査」『現代文NEWアプローチ』などでは、従来国語科が扱ってきた説明的文章や評論文などの文字テキストを素材としながら、国語科CRが求めている読解プロセスやフレームワークの要素を満たす問題設計がなされていた。このことは、素材が従来のような文字テキストであっても、国語科CRの理論を採用すれば十分新しい教育状況に適応できることを示唆するものであった。

6. 研究の課題

本研究では、解決されていないいくつかの問題が課題として残った。

一つ目は実証的な研究を取り入れる課題である。調査は実施したものの、本研究では時間をかけた授業実践による検証はできておらず、その実効性についてはまだまだ予測の段階でしかない。したがって、今後は実証的な研究を行うことによってその可能性をさらに立証していく必要がある。

二つ目は、国語科CRを体系的に具現化する課題である。本研究では、国語科CRの指導理論の検討は、既存の教科書教材等で実施してきた。しかし本来的に国語科CRの指導理論による完全な実践を構築するには、教材の選定の段階から国語科CRの指導理論を体現する教材づくりを目指し、教材、手引き、指導書、テストという総合的な教材を開発することが必要になる。

三つ目は、「書くこと」「話すこと・聞くこと」への研究を拡張する課題である。本研究では基本的に「読むこと」を想定した提案しかできていない。しかし、新しい指導理論として国語科CRを総合的に提案するには、「読むこと」にとどまらず、「書くこと」「話すこと・聞くこと」に関する研究が求められる。